

地域包括ケア啓発用物語

「なじよすっぺ！ はじまり編」

Ver_4.2

気仙沼・南三陸地域在宅医療委員会

登場人物

田佐大小南菅川泉泉
中浦杉門野田中谷谷

倫慶治美奈恭瑛敏芳
道太子智緒一美子男

元氣だったが、脳梗塞を發症し左半身に麻痺が残った。芳男は妻、介護、保険の何れも分からずに不安。福島在住の娘、年何回か様子を見に来る。病院の理学療法士が近所で親しい間柄。地域包括支援センターの担当医。脳外科の女医。芳男の担当。病院の地域連携。福祉用具貸与・販売事業所職員。介護老人保健施設の通所ハビリ事業所職員。

キャスト

効ナ田佐大小南菅川泉泉
果レ中浦杉門野田中谷谷
音 |

シ 倫 慶 治 美 奈 恭 瑛 敏 芳
ヨ 道 太 子 智 緒 一 美 子 男

(いずみや よしお)
 (いずみや としこ)
 (かわなか えみ)
 (すだ きょういち)
 (みなみの なお)
 (こかど みち)
 (おおすぎ はるこ)
 (さうら けいた)
 (たなか ともみち)

泉菊小武小千佐菅山小村
野野野
田地松田寺葉藤原辺寺岡

芳愛 雄る さ奈 瑛敏正
治 みと 央 恭
朗子 高子 み子 里 広朗

○オープニング

ナレーション「皆様、本日はお忙しいところご来場頂きまして、誠にありがとうございます。」

「気仙沼市と南三陸町の高齢化率は4割を超えており、多くの人が介護に直面していることと思います。」

「中には、介護保険のことや、申請方法等を知らないために、相談できずにいる人が居るかもしれません。もしも、介護で大変な思いをしている人が居るならば、『今日のフォーラムをきっかけに、介護保険サービスに繋がって欲しい。』そのために『関係するところの役割を少しでも分かってもらえたら。』そういう思いで、『なじよすっぺ！はじまり編』を企画しました。どうぞご覧ください。」

舞台裏。声のみ。

パワポクリック（家のイラスト）
パワポクリック（スリッパの音）

泉谷 敏子（声）「ごはん出来だよ、起きらいん。」

泉谷 敏子（声）「ばや、なにしたの？」

泉谷 芳男（声）「うゝゝ、うゝゝ。」

泉谷 敏子（声）「なにすや、なじよすっぺ。」

パワポクリック（家のイラスト）変化なし）
パワポクリック（スリッパの音）

泉谷 敏子（声）「なじよすっぺ。なじよすっぺ。なじよすっぺ。」

（ナレーション）「タベまで、とても元気だった芳男。突然の出来事に敏子はどうして良いか分かりません。」

パワポクリック（家のイラスト）変化なし）
パワポクリック（救急車）

（ナレーション）「病院に救急搬送された芳男、脳梗塞と診断され脳外科で治療を受け、幸いにも大事には至りませんでした。」

○病室

パワポクリック（病室の写真）

幕がベッドが見えるくらいまで半分ほど開くとステージにベッドがあり、芳男がベッドに入っている。芳男にスポットライト。

入院から少し経過し、気持ちも少し落ち着いていた芳男と敏子、ベッドの掛け布団を敏子が直しながら

泉谷 敏子「よがったあ。おら、ホントにたんまげだよ。なじよすっかど思ったでば。」

泉谷 芳男「早ぐめつけて良がったって先生も言っただ。」

泉谷 敏子「んだがら、まず喋んのいいがら。」

美智、階段から登場

小門 美智「どうですか？調子は？」

泉谷 芳男「お陰様で痛えどごは無いです。はい。右は使えっから、ご飯も食べだでば。」

小門 美智「そうですね。左の手足はある程度麻痺が残りそうです。残念ですが。」

泉谷 敏子「先生、助けでもらっただけでも、もっけてがすう。ありがとうございます。」

小門 美智「それで、来週から回復期リハビリの病棟に移ってリハビリを頑張ってもらいます。」

泉谷 芳男「はあ、リハビリで良くなんだべが？」

小門 美智「改善する可能性があると思いますので頑張ってくださいね。」

泉谷 芳男「分かりました。良くなって早く退院できるように頑張ります。」

小門 美智「それと、退院に向けて、介護保険の手続きをしていた方が良いかもしれませんね。」

泉谷 敏子「介護保険つす？年金がら引かれてっけんっおも、なじよしたらいいんだべ。」

小門 美智「詳しいことは、病院の一階にある地域連携室で相談してみてください。担当の大杉に話しておきますから。」

泉谷 敏子「はい。お願いします。」

○地域連携室

パワポクリック（地域連携室の写真）

幕が閉まる。

スポットライトで幕前のステージを照らすと、そこに椅子が向かい合わせにセットされている。上手丸2脚、下手丸椅子1脚。

下手の椅子に大杉治子が座っている。

幕の中から、ガサゴソと声が聞こえる。（「あつ、ここだ。やっとめつけた。」的な会話。）
パワポクリック（ドアのノック音）

敏子、幕から顔を出す。

泉谷

敏子「ごめんください。泉谷です。」

大杉

治子「ああ、小門先生から聞いてました。どうぞ。」

幕が閉まったまま、幕の隙間から芳男と敏子が入ってくる。

芳男は杖をつき、敏子は芳男がが転ばない様に支えながら部屋に入り、椅子に座る。

泉谷

敏子「すみません。先生がら介護保険の申請した方が良いと言われたんですが、何も分かんねえがら、教えてください。」

大杉

治子「芳男さんは、入院前は元気だったから、介護保険の申請をしろと言われても、何のことか分からないですよね皆さんそうですから安心してください。」

泉谷

敏子「ほんだでは。年金がら引かれるばりで、使わねえのにねえって言ってだんです。」

大杉

治子「まずは、要介護認定を受けて、『要介護なんぼ』とか、『要支援なんぼ』って認定してもらわないと、介護保険のサービスは使えないんです。」

泉谷

芳男「はあ、おれはなんぼだべ？」

大杉

治子「それを認定してもらうために申請するんですよ。」

泉谷

敏子「申請って、なじやすんだべ。なんにも分かんねえがら。すみません。」

大杉

治子「最初から分かる人は居ないんですよ。申請は市役所の高齢介護課の窓口に直接行って申請するか、市内に何力所がある地域包括支援センター、それか、居宅介護支援事業所って言って、ケアマネージャーさんの事業所に行って申請を代行してもらうこともできます。どこでも優しく教えてくれると思います。」

泉谷 芳男 「はあ、どごさあんだべ。」
大杉 治子 「一覧表を渡しますね。」

パワポクリック（事業所一覧）
治子はスクリーンを指さし、芳男と敏子もスクリーンを見る。

大杉 治子 「これが、気仙沼管内の要介護認定の申請代行ができる所の一覧表です。」
泉谷 芳男 「はあ、結構あるんだねや。どごいいんだべ。」
大杉 治子 「近々市役所に行く用事があれば市役所の窓口で良いですし、ご自宅の近くの事業所や、近くでなくても誰か知ってる人がいる所があれば、そこに相談してもいいですよ。」
泉谷 敏子 「ばや、なじよすつぺ。選ばいいね。明日、福島の花が来っから相談してみつぺが。」

芳男と敏子は幕の隙間に、お辞儀をしてからはける。
治子は下手にはける。

○病室

パワポクリック（病室の写真）
病室のセット。芳男は体調も良く、椅子に座っている。傍に敏子と瑛美が立っている。
3人を広めのスポットライトで照らす。
福島に嫁いだ娘の瑛美が様子を見に来ていた。

川中 瑛美 「お父さん、調子はどう？」
泉谷 芳男 「いいでは。なんぼが歩けるようになったし、昨日、先生がら、リハビリの病棟さ移って、リハビリしながら、退院の準備するって言われたんだ。」
泉谷 敏子 「退院したって、おら面倒見んのいいべが。」
川中 瑛美 「介護保険のサービス使えるんでないの。」
泉谷 敏子 「んだがら、介護保険使うの何だが面倒くせえんだつけ。なじよしたらいいんだがさっぱり分がんねがら。」

パワポクリック（ノックの音）

泉谷 敏子「はーい。」

恭一、お見舞いに現れる。

菅田 恭一「こんにちは、恭一です。」

泉谷 芳男「あら、初男さんどこの。ばや、わざわざ来てくれたのすか。」

菅田 恭一「おれ、こごでリハビリの理学療法士やってんのっさ。来週から担当すつから、よろしくお願いします。」

泉谷 芳男「ああ、ほんで安心だ。頼むがら。」

菅田 恭一「なじよでがす。」

泉谷 芳男「まずまずだね。」

菅田 恭一「顔色いいんでね。安心したでば。」

泉谷 芳男「んだがら、退院までに介護保険の手続き、すねばなんねんだでば。」

泉谷 敏子「地域連携室から介護保険申請すつとごの一覧表もらったけんと、どごさ頼んだらいいんだが分がんねつて言つてだどごっさ。」

菅田 恭一「おらいの親父の時は、市役所遠いがら、近くの『地域包括支援センター』さ頼んだよ。」

泉谷 敏子「『地域包括支援センター』っす？」

菅田 恭一「ほんでがす。あたりほどりで『包括』つて言うの聞いたごどねえすか？」

泉谷 敏子「そういえば、あつかもしえね。」

菅田 恭一「高齢者の介護の相談は、まず包括さ行つてみつといいと思うよ。色々教えてけるし、おんつあんみでに軽い人のケアプランは包括でやっぺがら。」

泉谷 敏子「ケアプランっす？」

菅田 恭一「ほんだでば。介護保険のサービスは、何が必要かを、ケアマネどが包括が計画立ててがら使うのいいのっさ。」

泉谷 芳男「何だが分がつた様な分がんね様なだけんと、おらほの地区の包括さ頼んでみっぺが。」

川中 瑛美「ほんで、私、早速行つてくるから。」

幕が閉まる。

○地域包括支援センター

奈緒は前ステージにスタンバイ
パワポクリック(包括カウンター)

スポットライトで幕前のステージを照らすと、そこに椅子が向かい合わせにセットされている。上手丸椅子一脚、下手丸椅子一脚。

下手の椅子に南野奈緒が座っている。

幕の隙間から瑛美が顔を出す。

瑛美、おそろおそろ入室する

川中 瑛美「ごめんください。父親の介護保険の相談に来たんですけど。」

南野 奈緒「はい。どうぞ。座ってください。」

瑛美、椅子に座る。

南野 奈緒「こんにちは。地域包括支援センターの南野です。」

川中 瑛美「こんにちは。」

川中 瑛美「実は父が脳梗塞で入院してて、左手と左足に麻痺が残ったんですけど、これからリハビリ病棟に移って、その後に退院らしくて、・・・。」

南野 奈緒「あら、大変でしたね。ご家族はどなたと一緒に暮らしますか？」

川中 瑛美「母親と二人暮らしになるんですけど、母が面倒見られるか心配していて、介護保険のサービスが使えたら良いかなと思って相談に来ました。」

南野 奈緒「そうなんです。全然、歩けない感じですか？」

川中 瑛美「あつ、今でも杖と歩行器使って歩けるんですけど、リハビリしても麻痺は残るみたいなんで・・・。でも、麻痺は左で、右利きなので片手である程度のことではできます。」

南野 奈緒「そうですね。お父さん頑張っておられるんですね。要介護認定では、要介護1から5と、比較的軽い要支援1・2という区分があります。お父さんは、ある程度自分でできるんですね。」

川中 瑛美「はい。もし、要支援と認定された場合、サービスは使えるんですか？」

南野 奈緒「要支援だと使えないサービスがあったり、介護度の重い人と比べれば、サービスを利用できる量が減りますが大丈夫ですよ。でも、申請して、非該当と認定された場合は、介護保険のサービスは利用で

きません。その場合は、市町が行っている地域支援事業などにより、生活機能を維持するためのサービスや生活支援サービスが利用できる場合があります。」

川中 瑛美「ああ、そうなんですね。いつ分かりますか。」

南野 奈緒「申請してから介護度が決まるまでに一ヶ月から二ヶ月ほどかかります。では、認定までの流れを説明しますね。」

パワポクリック（申請の流れがスクリーンに映し出される。）

奈緒と瑛美は立ち上がり前に出る。

川中 瑛美「お願いします。」
南野 奈緒「まず申請書を提出します。これが申請書です。」

パワポクリック（申請書）

奈緒が瑛美に申請書を渡す。

パワポクリック（申請の流れ）

南野 奈緒「今日書いて頂いても良いですし、後日持ってきて頂いても結構です。いずれにしても、こちらで申請代行しますので、市役所に行かなくてもいいですよ。」

川中 瑛美（うなづく）

南野 奈緒「次に、主治医の先生に『主治医意見書』を書いてもらいます。意見書は市役所から病院の先生に直接依頼しますので、ご家族が先生にお願いしなくても大丈夫です。」

川中 瑛美（ほっとした仕草）

南野 奈緒「したら、認定調査員が調査に行きますので、質問に答えたり、言われた動作をしてもらえば、調査票ができあがります。」

川中 瑛美（なんとなく分かったような分からないような様子）

南野 奈緒「調査結果と主治医意見書を基に介護認定審査会で、『要介護なんぼ』とか『要支援なんぼ』というのが決まります。」

川中 瑛美（へえ）

南野 奈緒「それが決まったら、どんなサービスがいいのかをケアマネジャーが、お父さんやご家族と一緒に相談しながら考えてケアプランを作ります。」

川中 瑛美（？）

南野 奈緒「そのケアプランを基にサービス事業所と契約してサービスを受けることになります。」

川中 瑛美「サービス使うまでにいろいろあるんですね。」

南野 奈緒「そうですね。分からないことがあったら聞いてください。今回、要支援と認定されたなら、ケアプランの作成も包括で担当しますので、お父さんがどんな暮らしをしたいのかを聞いたり、芳男さんの身体状況を確認したりしてケアプランを考えますね。よろしく願います。」

川中 瑛美「こちらこそお世話になります。よろしく願います。」

瑛美は幕の隙間に、お辞儀をしてからはける。

奈緒は下手にはける。

○病室

パワポクリック（病室）

（ナレーション）「要介護申請を提出し、主治医意見書も認定調査結果も整い介護認定審査会で、芳男さんは要支援2と認定されました。」

回復期リハ病棟に移ってからは、芳男さんと家族、主治医、病棟の看護師、リハビリの理学療法士とケアプランを担当することになった包括の南野さんが集まり、何回か話し合いが行われました。

また、包括の南野さんは、自宅の中や外の段差や手すりの有る無し、浴室やトイレ、寝室の環境等を確認したり、芳男さんが退院後に、どんな風に生活したいかなど、丁寧に聞き取りを行って準備しています。

幕は閉じたまま、芳男、敏子、瑛美の3人が幕の隙間から前に出る。芳男は杖をつき、敏子が支えながら幕前のステージに歩く。

病室のセット（椅子だけ）。下手の丸椅子2つに芳男と敏子が座り、上手の丸椅子1つに瑛美座る。

幕の中は会議室にセットチェンジ。

川中 瑛美「今日は、退院後の生活どうするか、みんなで会議すんだよ。」

泉谷 芳男「俺も会議に出んの？」

泉谷 敏子「だれ、主役出ねでなじよすんの。」

泉谷 芳男 「主役つつごとねえべっちゃ。」

瑛美、おもむろに前に出る。客席にアピールするように。

川中 瑛美 「年取って弱くなった人とか、病気や障害のある人なんかを、地域 みんなで支える仕組みを『地域包括ケアシステム』って言うんだって。今日の会議は、その『地域包括ケアシステム』で、お父さんのためにどうするのがいいかを、みんなで相談するんだから、お父さんが主役だよ、やっぱり。」

敏子、椅子に座ったまま分かったような口ぶりで

泉谷 敏子 「あんだが、なじよしたいが言わねば始まんねの。」

川中 瑛美 「地域連携室の相談員さんが、包括のケアマネさんに声を掛けてくれて、みんなでお父さんのこと話し合ってくれるんだよ。病院の先生も家で転ばない様に福祉用具があった方がいいかもしれないし、退院してもリハビリに通った方がいいって言ってたから、ケアマネさんが色々考えてくれて、その人たちも集まってくれるんだよ。」

泉谷 敏子 「ばや、もつけどごと。みんな忙しいのに。」

川中 瑛美 「本当に。有り難いね。さあ、そろそろ会議室に行きましょう。」

芳男、敏子、瑛美は幕の隙間にはける。

○退院調整会議

パワポクリック（会議室）

幕が開き、会議室のセット。机は『ハの字』上手の机に中央から芳男、敏子、瑛美の順に座っている。下手の机に中央から治子、奈緒、恭一、佐浦慶太、田中倫道の順に座っている。

大杉 治子 「本日はお集まり頂きありがとうございます。みなさんで、泉谷芳男さんの退院後のことについて相談したいと思います。早速、退院後にどのように暮らしたいか芳男さんからお願います。」

泉谷 芳男 「本当に今日はありがとうございます。私は退院したら、手足は不自由だけれども、家にばりは、居たくないです。なんぼでも良くなるようにリハビリもしたいと思っています。」

大杉 治子 「主治医の先生からも、リハビリは続けた方が良くと話されています。それと、転倒予防が大事とも言われています。」

南野 奈緒 「その情報は事前に頂いており、あらかじめ、ご自宅の状況を確認した上で、芳男さんに福祉用具のレンタルと通所リハビリの利用を提案して、利用したいとの希望がありましたので、事業所さんを選んでもらい、今日は、その事業所さんにも来てもらいました。」

佐浦 慶太 「福祉用具事業所の佐浦です。よろしく願います。」

田中 倫道 「通所リハビリの田中です。よろしく願います。」

南野 奈緒 「まず、玄関に段差があるので、転ばない様に手すりをレンタルしてはどうでしょうか。手すりを付けたイメージの写真を持ってきました。」

パワポクリック（玄関に手すりを付けたイメージの写真）

泉谷 芳男 「これだと助かる。」

泉谷 敏子 「んだてば、玄関でひっくり返えんね様に手すり欲しいんだてば。そして降りだどごさ椅子おげば座って靴はぐのいいっちゃ。」

佐浦 慶太 「このての手すりは、退院までに準備できます。段差に合わせて調整させて頂きます。」

パワポクリック（リハビリのイラスト）

菅田 恭一 「リハビリでも手すりに掴まって階段の上り下りを行っていて、この手すりがあれば、家の段差に対応できると思います。」

南野 奈緒 「それでは、手すりのレンタルをケアプランに入れたと思います。佐浦さん、よろしく願います。」

佐浦 慶太 「分かりました。」

泉谷 芳男 「よろしく願います。」

南野 奈緒 「次に、通所リハビリですが、芳男さんは、退院後にやりたいことがあるそうで、ね、芳男さん。」

泉谷 芳男 「あの、麻痺はあっても、家に籠もりだぐねえのっさ。杖さげあれば、隣の菅田さん家さ行くのいいべから、階段で転ばねえようになりてえんだてば。そこの恭一っあんの親父さんと将棋すんの楽しみなんだてば。ほんだがら、でぎるだけリハビリやりでんだてば。」

南野 奈緒 「事業所さんと受け入れについて調整してみたところ、要支援の方ですので、週1回か2回のご利用が可能とのことでしたが、どうでしょうか？」

泉谷 芳男 「なんぼでもリハビリして、いぐなりでえんで、週2回行きでえね。」

南野 奈緒「通所リハ事業所の田中さん、受け入れは可能でしょうか？」

田中 倫道「大丈夫です。火曜と金曜の2回でどうでしょう？」

泉谷 芳男「ありがとうございます。んで、他の日は家でできるごど教せられてやってみます。」

南野 奈緒「他にお困りのことはありませんか。」

泉谷 敏子「あどの事、家さ帰って見ねば分がんねえ。今は思いつかねえでば。」

南野 奈緒「それでは、退院後にお困りのことがあったら相談してください。」

大杉 治子「退院前に、脳梗塞の再発予防として、栄養士の栄養相談があります。ご家族のみなさんも一緒に聞いてもらうと良いと思います。」

川中 瑛美「分かりました。」

大杉 治子「それでは、芳男さん、応援してくれる人がいっぱい居るので、退院後も健康管理に気をつけて頑張ってください。」

泉谷 芳男「ありがとうございます。」

泉谷 敏子「みなさん、よろしくお願いします。」

川中 瑛美「ありがとうございます。よろしくお願いします。」

芳男を両脇から敏子と瑛美が支えて幕前に出る。
幕が閉まる。

○病室

パワポクリック（病室の写真）

芳男は椅子に座り、敏子と瑛美は両側に立っている。

退院の実感が湧いてきた芳男と家族が、連携会議の余韻を引きずって話している。

川中 瑛美「お父さん、会議の前は乗り気でなかったのに、いっぱい喋ったね。」

泉谷 芳男「まあ、みなして、色々考えでけだがらだな。」

川中 瑛美「実際に退院してみないと分かんないけど、何かあったときには、お母さんも無理しないでケアマネさんに連絡していいんだからね。あと、家でどなりハビリすれば良いのか、ちゃんと聞いてから頑張るってね。」

泉谷 芳男「ほんだな。みんな、頼りになるしただっか、教えられながら頑張ってみっぺ。」

川中 瑛美「介護保険のサービスだけでなく、社協のサロンなんかもあるらしいよ。それと、ご近所さんとお茶

泉谷 敏子「飲みするだけで介護予防なんだって。隣の恭一さんが言ってた。ある意味近所の人サービスだね。」

泉谷 芳男「あんた、退院したら、初男さいさ行つて将棋すんのもりハビリなんだつよ。」

泉谷 敏子「そいずが一番の楽しみだ。近所の人にも恵まれだな。」

川中 瑛美「今、どごも年寄りばりだがら、みんなて助け合ねばね。」

川中 瑛美「それこそ地域包括ケアシステムだね。」

パワポクリック（地域包括ケアシステムの絵）

泉谷 敏子「痛でえがら、横ならいん。」

敏子と瑛美に支えられて、芳男とω人が幕の間からはける。

ナレーション「皆さん、いかがだったでしょう。今回は、介護保険制度の入り口の話です。劇では病院に入院した場合の流れを演じておりますが、在宅の場合の流れは、受付で渡したパンフレットに書いておりますので、後ほどご覧ください。」

「今回の劇を通じて、介護保険のサービスに繋がってもらえたら嬉しいです。また、介護が必要な人を地域で支える『地域包括ケアシステム』のことが、少しでも分かってもらえて、今、困っている人が、地域の中で、支え合いながら、その人らしく、いきいきと暮らしていけたら良いですね。」

幕開く

出演者は前ステージに出る。

拙い演技ではございましたが、暖かくご覧頂きまして誠にありがとうございました。」